

境内の北、旧中山道に面したところにある、伝道掲示板の令和6年9月に掲載するものを紹介します。

伝道掲示板

blogから

伝道掲示板には1ヶ月にひとつの言葉を紹介しています。經典の引用であったり、詩や小説のなかの言葉であったりします。道ばたの1メートル四方の掲示板ではお伝えできない、ことばの周辺はblogに載せています。

九月のことば
自身の知識や経験を押し付けけるのではなく、「坐禅はいいものだ」と届かなくてもいい、いつか届くようにと伝えることをやめないことが大切
松原泰道

お盆の忙しいさなかに、出版社から一冊の新刊書が送られてきました。「謹呈」の短冊は添えられているけれど、送り状はない。本のタイトルは『ようこそお寺へ』（柏書房）。著者は小池陽人師。著者も出版社も心当たりはないけれど、本文に入る前付けにイラストレーション・川口澄子、装丁・山原望の名前があるのを見つけました。松岩寺住職の著書『うちで禅』と『またまたうちで禅』のイラスト・装丁コンビが作成した本だったのです。お彼岸の九月は、この本から引用します。

ことばの主である松原泰道師（一九〇七〜二〇〇九）は、仏教書としては空前のミリオンセラーである『般若心経入門』（祥伝社）の著者です。

「伝えることをやめないことが大切」は、泰道師の外孫である東京世田谷龍雲寺・細川晋輔住職から小池陽人師が教えられた言葉です。この言葉だけで意味はわかりはするのですが、YouTubeの登録者が10万人を超えるという法話の名人・小池師は次のような例話を添えて、より深く言葉の意味を伝えてくれます。『ようこそお寺』から引用します。―「わかりやすさ」の落とし穴―と題した一節です。

以前、ニュース番組のメインキャスタに就任された女性アナウンサーとタモリさんの対談を拝見したことがあります。アナウンサーの方が「分からないことがあったら、視聴者が離れてしまうのではないか。だから、万人に分かるような番組をやるうと考えてやってきた」とおっしゃいました。

それに対してタモリさんは「テレビを過度に分かりやすくしようとするのは、テレビを見ている人をバカにしているのではないかな。子どもから大人、お年寄りまで分かるような番組をやるうと思つたことは、一度もないですね。分からないところは分からないでいい。見ている方に立つて何かをやつたりすることは、ほとんどないのかもしれない。自分が面白いと思うことをやっている」と答えられました。この言葉は衝撃的でした、分かりやすさを求めるばかりに、本当に伝えたいこと、やりたいことがずれてしまう。あるいは、受け手に対して、情報を限定させてしまうことがあるのだと気づかされました。仏教を語る法話では、そのような壁によくぶつかります。

小池師は松原泰道師の名言のあとに、タモリという言葉を持つてくるんですね。タモリの言葉を小池師はテレビで視聴して、ハツとした言葉だから、何かの手段で残して、自分の引き出しにいられておいた。そして、松原泰道師の言葉にハツとして、引き出しから出して、ふたつを結びつけたわけ。お見事です。

九月は秋彼岸の月。お墓参りだけが彼岸ではない意味を、届かなくてもよいから、伝え続けなくては。

妙心寺二世650年遠諱

令和9年3月春

爛漫の京都妙心寺へご一緒にしませんか！

令和九年三月に本山妙心寺第二世・

微妙大師（みみょうだいし）の六五〇

年遠諱（おんき）法要が営まれます。

松岩寺に割りあてられたのは三月二十五日（木曜日）午前十一時からの法要です。

遠諱は五十年に一度、祖師方や故人を偲ぶ節目をいいます。現地集合解散もあります。別紙に申込み書を同封しました。申込み締め切りは9月25日です。

宿泊は二人で参加の方にはツイン室を。おひとり様にはシングル室を用意します。本山の宿坊・花園会館はシングルの部屋数が少ないので、京都市中心部の「からすま京都ホテル」に定員十五名分の部屋を、すでに確保しています。そうはいっても、「〇〇ホテルのポイントが貯まっている」。あるいは、「〇〇ホテルの割引券がある」なんて方も、おられるでしょうから、ご自由にどうぞ。

前回、妙心寺へご案内したのは、平成二十四年秋でした。その後は、ご本



「阿じろ」の精進膳

山へ背を向けて、松永安左工門を追っかけたり、「夏目漱石と禅」なんてテーマで鎌倉、熊本、四国へいつたりしているうちに、コロナ禍。

ご本山も今回の法要がおわれば、しばらく大きな行事はないので、現住職が旅行を企画するのも、これが打ち止めになるでしょうか。ふるってご参加ください。

さて、まん中にかかげた写真は、妙心寺料理番「阿じろ」のお膳です。「阿じろ」のホームページから無断コピーしました。三月二十五日の法要後、本山の建物で、「阿じろ」のお膳をいただくから、許してください。

妙心寺のすごいところは、重要文化財の建物をただ拝観するのではなくて、そこで法要をして、そこで食事もする（儀式によってはお酒もでる）ことではないでしょうか。

つまり、江戸時代初期に再興された建物が、今も生きていて現役です。そんな妙心寺へ、ご一緒にしませんか！